
僕の夏休み

ウナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の夏休み

【コード】

N8049E

【作者名】

ウナ

【あらすじ】

友達の薦めで喫茶店でバイトを始めることになった海音。だが、マスターの本心は……。

第1話

入学してから早々に行われた中間テストがようやく終わり、五月の爽やかな風を感じる余裕がようやく出てきた頃、クラスメイトに誘われて初めて喫茶店に入った。それが、『街角喫茶』だった。

「絶対ウミは気に入るよ！」

海音の手を引っぱるようにして歩く匠の足取りは軽い。

高校生にしては童顔の匠が、やはり高校生にしては大人びた顔をしている海音の手を引いている姿は、すれ違う人々の気を惹くらしく、ここに来るまでどれくらいの人々の視線を浴びただろうか。

特に女子高生を初めとする女性達は視線が外せないらしく、しつこく二人の姿を目で追っていた。

匠は童顔と言っても弟系のアイドル顔をしていたし、海音に至ってはその容貌はあまりに整いすぎていた。

こんな二人が連れ立っていれば、嫌でも人目を引き付ける。

視線を気にして俯き加減の海音に対し、匠はどこまでも屈託ない。

そんな匠の手を無下に払うこともできず、海音はひたすら俯いていた。

一方全く気にする素振りもない匠の方は、今から行く場所がどれほど素晴らしいか、そのことを海音に伝えることで頭が一杯らしい。

「すごい雰囲気あるんだー」

匠が気に入っていて、自分の家から近く、更に学校からも近いというその店は、閑静な住宅街の一角にあった。

学校から徒歩10分。

駅からは徒歩20分。

そして匠のマンションからだとは徒歩3分だというこの場所。

いつも学校と駅の往復しかしていない海音にとって、ここは初めて来る場所だった。

高級住宅街が醸し出す雰囲気にはささか圧倒される。

（こいつ・・・こんなところに住んでんのかよ・・・）

確かに匠は、裕福な家庭に育っただろうと周囲に感じさせる雰囲気をもとっている。

おっとりしていると言うか、どこか世間離れしていると言うのか。

「すごい大きい家ばつかでしょ！」

匠の言葉通り、大きな庭のある大きな家ばかりが建っている静かな住宅街に、人影はない。

子供の声ができるわけでもなく、しんと静まり返っている様は異世界に迷い込んだ気分させられる。

「ここだよー」

匠はまるで自分の家を紹介するような口ぶりで一軒の洋館風の家を指差した。

この住宅地の中でもひととき広い土地を占めている。

家、と言っにはいささか大きすぎて、まさに洋館という言葉がぴたりとくる。

喫茶店だというけど、看板は出ていない。

それはまるで常連以外の人間を拒むかのようだ。

こんな場所で、こんな風に人伝にしかその存在を知られなかったら、果たして経営なんて成り立つのだろうか？

「こんなところ、あつたんだ」

『街角喫茶』の目の前に立った海音は、ただただその佇まいに圧倒され、その一言を口から押し出すのが精一杯だった。

そんな海音の反応に気を良くしたのか、「中はもつと素敵だよー」早く早くと匠に急かされ、重たい扉のノブに手をかけた。

外の明るさと店内の薄暗さのギャップに、一瞬クラツと眩暈がした。後から入ってきた匠が「大丈夫？」と心配する。

彼は慣れているのだろう。

眩暈を感じた様子はない。

「あ、うん」

目が慣れて、ようやく中を見回す余裕ができた。

店内はたつぷりとした広さがあった。

カウンター席が6つと、4人掛けのテーブル席が2つ。

カウンターはかなり広く、席の間隔も広くとってある。

そして丸い大きなテーブルが店内の真ん中に置いてある。

優に10人くらいは座れそうだ。

「ね、座ろ？」

「ここが俺の指定席」
と無邪気に言いながら、匠はカウンターのスツールに腰掛けた。

カウンターも奥行きがあり、かなり広めだ。

その上にシュガーポットや紙ナプキンなどは一切載っていない。

愛想も素っ気もない、そんな印象だった。

匠が腰を下ろしたのは、一番手前から2番目の席。

海音は自然とその隣、一番端の席に腰を下ろした。

「俺ね、中学生の時から来てるんだよ」

メニューを海音に差し出しながら、足をブラブラさせている。

「おいおい。中学生が喫茶店なんかに入り浸って大丈夫かよ？」

海音が聞くと、「俺の家の近所だもん」と一蹴された。

（そうゆう問題か？）

「最初はおふくろと姉貴と3人で来たんだ」

（なるほどね）

「で、すっかりこの雰囲気が入っちゃって、それ以来常連つてわけ」

「ずいぶん渋い店だなあ」

「でしょ？でも、ウミはこういう雰囲気好きだよね？」

ニッコリ笑ってそう言われると、当たっているだけに「うん」と返すことしかできない。

「俺はいつものにしよつかな。ウミはなんにする？」

「んじゃあ、俺もお前のいつものにしてみようかな」

この雰囲気は圧倒されて、メニューを広げる気も起きなかった。

常連の匠に全てお任せすることに決め、海音は店内をキョロキョロ見回す。

落ち着いたダークブラウン系の家具で統一された店内。

庭に面した大きな窓からは、外の明るい日差しがたつぷりと入るだろうに、木製のブラインドでその陽は遮られている。

厨房は店内からは完全に見えないようになってる。

壁に嵌め込まれたカップボードを背にした、かなり大きなカウンタ
ー。

そこには様々なカップやグラスが飾っており、食器類が好きな海音には興味をそそられる光景だ。

「いらつしゃい」

低い、けれども通りのよい声だし、慌ててそちらに目を向ける。

背の高い、肩幅もがっしりした体型の男性が、カウンターの向こうに立っていた。

（最初からいたのかな？）

店内に入った時はいなかったよな？と海音は首を傾げた。

彼は海音と目が合うと、ペコンと頭を下げてくる。

「こんにちは」

「あ、こんにちは」

返事をするのに間が空いてしまった。

彼は海音ににこつと笑いかけると、今度は匠に話しかける。

「珍しいね。ショウくんが友達連れてくるのは」

「うん！こいつは特別なんだ」

「特別？」

「そ。俺の恋人なの」

匠はにつこり邪気のないような笑顔で言うと、海音とマスターの顔を交互に見る。

「美人さんでしょ？」

「シヨウくんは面食いだからなあ」

ハハツと軽く笑うマスター。

海音はマスターの言葉に首を傾げた。

(おいおい。本気にしてないだろうな?)

誤解されるから止めると言ってるのに、一向に止めない匠。

入学以来、海音は匠の知人に対して毎回このように紹介されてきた。初めて匠の母親に会った時もこんな調子で紹介され、海音は思わず飲んでいた紅茶を嘔き出してしまった。

だが、さすが匠の母親と言うべきなのか「あら」と一瞬驚いた様子ではあったが、「この子はとてもわがままだから手を焼くでしょ？ よろしくお願ひしますね」と続けた。

いわば公認された、と言うべきか。

海音は言葉にならず、ただただ頭を下げるので精一杯だった。

彼としては、あくまでも「友達として」精一杯仲良くさせてもらいます！という意味で。

そんな匠のせいで、学内にはこの冗談を本気にとっている生徒も多数いる。

実害はないから(?) あえて弁解もしないが、たまに「頑張つて下さい！」と妙な応援をされることもある。

クラスメートには「嫁さん元気か？」等と聞かれる始末。

からかわれる海音としては「俺が旦那か・・・？」とツツこむのがやっただ。

あれっ? これつてもしかして実害か???

マスターは匠の軽口には慣れていいのか、さらっと聞き流した。

海音にとっては非常にありがたい大人の対応だ。

「こんにちは。はじめまして」

そう言いながら、大きな手を海音に差し出す。

匠とマスターの会話を反芻していた海音は、目の前に差し出された手に気付き、ハツと顔を上げ反射的にその手を握った。

(挨拶に握手を求めるのって珍しい)
握手しながらそう思った。

(外国で生活してたのかな?)

「このマスターの津行和早です」

「かずさ?」

聞きなれない名前に、思わず口に出してしまつた。

「珍しいでしょ?」

「あ、はい・・・」

よく言われるのだろう。

マスターはそう言いながらまたにっこり笑つた。

海音も自分の名を名乗ろうとすると、横から匠が口を挟んだ。

「前から話してる勝浦海音くんだよ」

「あ、勝浦海音です。よろしくお願いします」

ペコンと頭を下げる。

匠がてきぱきと注文をし、マスターはひとまずカウンターへと戻つた。

匠の『いつもの』はアイスコーヒーらしい。

海音が開かずに戻したメニューを見ながら、「ここはケーキもおいしいんだよ。せっかくだから食べたらず?」

(そついやあこいつはメチャクチャ甘党だったっけ)

よく立ち寄る駅前のカフェの光景がふと頭に浮かんだ。

(キャラメルラテとかなんとかフラペチーノとか、生クリームたっぷりのをふつーに注文するもんなあ)

2人の間では毎度のように「女子じゃないんだから」「いいじゃん、好きなんだから」と言うやり取りが交わされるのだ。

そんな光景が思い出され、ついクスツと笑ってしまった。

そんな匠の『いつもの』が極々普通の『アイスコーヒー』だったことに、今更ながら海音は驚いた。

「ケーキはいいよ」

海音がそう返すと、匠は「遠慮しなくっていいのに」と言いながら

メニューを一瞥し、「じゃあお任せってことで」と1人納得し、マスターに追加注文を伝える。

「喉がかわいているだろうから」とマスターは先にアイスコーヒを運んできてくれた。

「お冷も出してなかったね」

「ごめんごめんといいながら、三日月のレモンが浮かんだお冷も置く。ありがと」

匠が2人分受け取り、海音の前にもグラスを置いた。

マスターが再びカウンター内に戻ったので、海音はアイスコーヒを一口啜った。

匠はガムシロップを入れるのに手間取ってる。

(おいおい。それ、一体いくつめだ?)

匠の手元に視線が釘付けになる。

「ケーキ頼んだのに、コーヒも甘くするのかよ?」

海音の口からつい言葉が漏れた。

海音のあきれた視線にも気づいたのか、匠がジロリと視線を向ける。

「あきれてるんでしょ?」

凶星。

「あきれるって言うか・・・感心してるって言うか・・・」

海音にはとても真似できない芸当。

ガムシロを4つ入れ、更にコンデンスミルクを2つ入れる。

これではもはや、アイスコーヒとは言えないだろう・・・。

それではようやく満足したのか、おいしそうにストローに口をつける。見てるこっちはそれだけで胸焼けしそうだ。

「にしても、高校生が入り浸るにはずいぶん渋い喫茶店だな」

匠のアイスコーヒから視線を外し、海音はそう言った。

「まあ、喫茶店自体、今はあんまり見かけないよね」

確かに。

最近チェーン店のカフェは至る所で見かけるけど、こういう個人経営の喫茶店はあまり見かけなくなった。

「で？その行きつけの喫茶店に俺を招待した理由は？」

匠に誘われた時から聞きたいと思ってた事をようやく口にする。

「俺のお気に入り店の店にウミを是非招待したいの！」

お得意の天使の笑顔でそう言われ、「面倒くせえなあ」と言いつつも邪険にできずついてきた。

「なんで？」と理由を聞こうとも思ったが、きっとその場では答えないだろうと思いいその質問はしまっておいた。

チユーツと音を立ててコーヒーを啜る匠。

「お得意の推理、してみたら？」

どうやら、中々言い出しづらいことらしい。

（こいつがこうした態度をとる時は、たいてい頼み事の時なんだよなあ）

入学式から約2ヶ月。

その間に大体匠のことは分かるようになってきた。

なんと言っても裏表のない純粹・素直・単純な性格。

それ故に分かりやすい。

（こいつが俺に頼み事って言ったら・・・）

「追試用の家庭教師？」

「ええ？」

海音の言葉に心底驚いたと言わんばかりに、匠は思い切り目を見開く。

「テストの出来が悪くって、俺に追試の家庭教師してほしい、とかじゃねーの？」

「ちがうよ！」

むくれて即座に否定する。

こういう態度が同級生ながら幼く感じ、ついついからかってしまう海音だった。

「大体、まだテスト返ってきてないだろ」
確かに。

（ま、追試のための家庭教師なんて頼んでこないだろうな。こいつ

は)

アイスコーヒーに口をつけながら考える。

追試の心配するような器の小さい奴じゃない、って言ったら褒めすぎかもしれないが、匠の成績だったら追試を受けるまでもないだろう。

「じゃあ、何？」

「ここでバイトしない？っていうスカウト」

えへへ〜と邪気のない顔で笑う。

海音が密かに『天使の笑顔』と名付けている邪気のない笑顔。

「へっ？」

思わず声が裏返った。

そして匠の顔をまじまじと凝視してしまう。

何？突然。

そりゃあ接客業とかって嫌いな方じゃない。

人当たり良くないけど。

この店もいい感じだし。

今バイトもしてないし。

でも、いきなりバイトって……。

一体なんで？

第2話

「で？店にはもう慣れた？」

カウンターのオレンジジュースを飲みながら、匠がからかうような表情で聞いてくる。

「まあな」

海音はなるべく音を立てないように気をつけながらカップを洗う。これもだいぶ上手にできるようになってきた。

あの日から2週間。

初めてこの喫茶店に連れてこられ、のんびりお茶を飲む間もないまま、あれよあれよと言う間にバイトすることに決まったあの日。

その日以来、飽きもせず毎日ここに立ち寄る匠に、暇人はおまえじゃないかと思う。

「板についてきたじゃん」

「そーか？」

手を休めずに相手するのも慣れたものだ。

「楽しい？」

「まあな」

「怒ってる？」

「まあな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・冗談だよ」

本気にすんなって。

だからからかい甲斐があるんだよなあ、こいつは。

「でもさ、マスターは一体何が知りたいんだろ」

海音が話題を変えると、匠はすぐに乗ってきた。

「さあ・・・俺にもわかんないんだよねー」

「あ、そろそろだ」

海音は洗剤を洗い流したカップを拭きながら、時計に視線をやった。

視線の先にはアンティークの振り子時計がかかっている。

と同時に、ガチャンとノブが回される音が響く。

重たい扉を開けたのは、背の高い少年。

逆光で顔が見えないけど、海音にはシルエットだけでそれが誰だか分かる。

「いらつしゃいませ」

マスターが浮かべる穏やかな微笑までは行き着いてないだろうけど、にっこり笑顔を向けた。

「こんにちは」

彼は真ん中の大きなテーブル席に腰を下ろした。

「今日も借りるね」

「どーぞ、どーぞ」

お冷とメニューの準備をする。

「しばらくお前の相手はできないけど、拗ねるなよ？」

小声で匠にそう言ったら、「べえ」とあっかんべえが返ってきた。

「いつも悪いね」

「大丈夫ですよ。ガラガラですから」

彼、桔梗明日佳は海音・匠と同じ高校の1つ先輩だ。

桔梗明日佳。

名前だけ聞くとまるで女の子のようだけど、れっきとした男子生徒。学内にその名を知らない者はいないだろう。

その整った容姿は、すれ違う人の目を惹かずにはいられない。

明るく屈託ない性格で、学校でも男女の別なく人気は高い。

演劇部、部員。

演劇部員の間では陰の部長と言われている人物。

身長176センチ。体重60キロ。

血液型A型。

匠は生徒手帳に素早く目とペンを走らせる。

(これで顔写真撮れば完璧なんだけどなあ)

いつか盗撮でもするか?などと穏やかでないことを考える。

海音は意外に思うだろうが、匠はこう見えて完璧主義のところがあった。

「こんにちは」

桔梗に続き、よく通る声で挨拶をしながら入ってきたのは先矢泉帆。彼女が演劇部の部長。

スラっとした長い足。

背も高く、舞台映えするその容貌。

顔立ちは整ってはいるけど、どこか人工的で冷たい印象を与える。

サラサラのストレートヘアが肩の辺りまで伸びている。

元々色素が薄いのか、自然な茶髪と茶色の瞳が綺麗だ。

遠慮のない匠は、初めて泉帆を見た時に海音にこそつと耳打ちした。

「整形かなあ？」

「お前・・・それは言いすぎ」

身長167センチ。体重48キロ。

血液型AB型。

続いて泉帆の親友・森崎奈於が入ってくる。

身長162センチ。体重52キロ。

血液型O型。

彼女は染めた茶髪をポニーテールにしてリボンで結わえている。

奈於はカウンターの方向に人懐こい笑顔を向け、「こんにちは」。お

疲れ様」と挨拶と共に労いの言葉をかけてくる。

日頃から女の子は愛嬌だと言い切る匠は、奈於に対して好印象を持っているらしい。

「ゆっくりしてって下さい」

女子免疫の低い海音も、奈於にはさらつと言葉を返せる。

彼女には泉帆とは違い親しみやすい雰囲気がある。

「私達だけみたいね」

桔梗の隣の席にかけながら、泉帆が言った。

奈於は並んだ二人を見て、視線を落とす。

「ああ。まだみたいだね」

海音が3人分のお冷とメニューを運ぶ。

「ありがとう」

奈於がグラスを受け取り、桔梗と泉帆の前にも置いてくれた。こつという気遣いをさらつとできるのが彼女の魅力でもある。

「注文、いいかな？」

桔梗に声をかけられ、メモを取る。

「ホットケーキと紅茶。腹へっちゃった」

海音に向かってクシャツとした笑顔を向ける。

邪気のない、その無防備な笑顔に、一瞬ドキツとした。

明日佳は黙っていれば泉帆に負けず劣らずの容姿端麗ぶりだ。

まさに美少年と言える存在だが、表情がクルクル変わって見えて飽きない。

「私はクリームソーダお願い」

奈於もお決まりの注文をし、続いて泉帆が「私はレモンスカッシュ」と注文した。

厨房では注文を聞いていたマスターが、既に手際よくホットケーキを作り始めている。

海音はカウンターに下がり、飲み物の準備にかかる。その間も、耳はしっかり3人の会話をとらえていた。

第3話

「遅いね」

明日佳の言葉は短いけど、それでもその声はどんな喧騒の中にあっても耳に入ってくる。

それは彼の声の特性なのか、それとも私が彼のことが好きだからなのか。

「そうね。あ、凧沢くんは欠席だわ」

泉帆がクスクス笑いながら言った。

「どうした？」

「ううん。今朝、私のところにわざわざ補習があるからって言いに来たの」

その時のことを思い出し、更にクスクスと笑い声を立てた。

「泣きそうな顔しちゃって。なんかかわいくって」

ストローに口を当て、笑いかみ殺す。

凧沢智哉は今年入ったばかりの1年生部員だ。

1学年4クラス。

彼は海音と匠と同じクラスだった。

(そついやあいつ、英語の補習受けてたっけ)

「ふーん・・・」と誰にも聞こえない声で泉帆の言葉に頷いたのは匠。

凧沢智哉。

身長172センチ。体重64キロ。

海音・匠のクラスメイト。

人懐っこい性格は、匠に通じるものがある。

成績はいまいちだが、スポーツは万能。

特にサッカー部からは直々に勧誘されたほどだ。

そんな智哉も演劇部の部員の一人。

英語の補習で今日の部会は欠席ということだが。

演劇部員達の会話を盗み聞きしているのは、海音だけではなかった。海音が仕事をしている間、匠もしっかり彼らの会話を聞いていた。もちろん、そんな素振りには少しも見せず知らん顔しながら。

「おまちどうさまです」

海音ができたてのホットケーキと紅茶を明日佳の前に並べる。

泉帆と奈於の飲み物は、既に運んであった。

「ありがとう。ここに来ると食べたくなるんだよね」

ホットケーキにバターを塗り、更にシロップに手を伸ばす。

「どうやら、彼も匠に負けず劣らない甘党らしい。」

「あんまりかけると太るんじゃないの？」

奈於がからかうように言うと、明日佳はぶうと頬を膨らませた。そのしぐさに海音が思わず吹き出す。

「あ、笑ったね」

頬は膨らませたままだが目は笑っている明日佳が抗議する。

こういう表情・仕草がその整った容貌に合わず、それが明日佳の人気の所以にもなっている。

「ごめんなさい。ごゆっくり」

海音が微笑を残して去ると、泉帆は大きく息を吐いた。

なぜか海音を前にすると微妙に緊張する。

なぜか気を引き締めなくてはと思う。

なぜだろう。

ただのバイト、同じ高校の後輩に過ぎないのに。

それでも泉帆の第六感はずりずりとするのだ。

気を抜くな、警戒しろ、と。

気を抜くと心の中を見透かされそうで。

演劇部員全員が揃ったのはそれから30分もしてからだった。

もちろん、補習で欠席の智哉はいないが。

それぞれが飲み物や食べ物注文し、それが運ばれればし雑談があ

り、それからようやく部会らしい話題に入る。

そうは言っても文化祭までは特に発表の舞台もなく、部会と言う名のただの集りに過ぎない。

海音に言わせれば演劇部員達は、放課後ここに通ってくる匠とたいして変わらないただの暇人の集まりだ。

「新入生歓迎会の時のほなかなか評判良かったよね」

匠が小声で海音に話しかける。

海音は「ああ」と短く頷いた。

あの劇は確かに結構おもしろかった。

演出もうまくつたし、何より脚本がよくできていたと思う。

(あの脚本、誰が書いたんだろ?)

「次の舞台は文化祭?」

柏木立夏がオレンジジュースの氷を噛み砕きながら、誰にもなく聞いた。

柏木立夏。

身長165センチ。体重48キロ。

彼女はまさに今時の女子高生だ。

短くしたスカート。

ルーズソックス。

校則がゆるい高校だから許されているが、化粧もバッチリしているし、ゆるくパーマもかけている。

グラスを傾けるその指先には、綺麗にマニキュアが塗られている。

「その前に夏休み恒例、他校とのがあるだろう」

尚村静季が答える。

「ああ。あつたね、そういえば」

「面倒だけど、やらないわけにもいかないだろうし」

尚村静季はその名の通り、物静かな性格だ。

明日佳のような明るさはない。

決して前面に出ることはないが、彼がいないとなんとなく寂しい、そんな気持ちにさせる。

そして、なかなかの聞き上手。

彼に相談事を持ちかける同級生は少なくない。

身長165センチ。体重50キロ。

かなり華奢な体格だ。

立夏と静季のやり取りを聞いていた、1年生部員の高瀬未香子が隣の席の北園司に聞く。

「夏休み恒例の他校とのつてなんですか？」

司は視線を文庫本から未香子に向けるとメガネをちよっと上げた。

北園司。

身長180センチ。体重70キロ。

演劇部の中では一番背が高い。

彼はマメな性格で、演劇部では書記のような仕事をしている。

手先もかなり器用。

外見はメガネをかけたインテリ風。

柔らかそうな茶色がかったくせつ毛。

根っからの演技派なのか、高校生のくせにやたら気障ったらしい態度をとる。

が、そこがなぜか女子生徒には人気だ。

高瀬未香子。

身長158センチ。体重52キロ。

彼女も智哉と同じく海音や匠のクラスメートだ。

クラスでも控えめでおとなしい彼女は決して目立つ存在ではない。

が、芯の強さを感じさせるその目は人の印象に強く残った。

染めていない漆黒の髪は入学式は肩の辺りまで伸びていたが、5月の連休明けにはばっさり切られてショートカットになっていた。

「ああ、未香子は初めてだもんな」

「ええ」

「夏休みに、親交のある他校と合宿して1本劇を見せ合っただ」

「へえ……。文化系の部活で合宿って珍しいですね」

「かもな」

司は視線を文庫本に落とし栞を挟んだ。
それからまた改めて未香子に戻す。

「でも、出合いの場になってるんだぜ」

「出合いの場？」

「そ。その合宿がきっかけで、付き合い始めるカップルが結構いる
って話」

「そうなんですか？」

「ああ。ホントか嘘かは知らないけど」

いたずらっ子のような笑みを浮かべる司に、未香子は一瞬ドキツと
した。

メガネのせいか、いつも大人びた雰囲気纏っている司が、こんな
表情を浮かべるなんて知らなかった、と。

「へえ・・・意外」

未香子が思わず呟く。

「そう？でも、そうでもないとか中々出合いの場ってないじゃん」

司は未香子の呟きの意味を勘違いしてたらしい。

「あ。ええ・・・」

未香子も敢えて訂正はしなかった。

「未香子もいい奴と出会えるかもよ」

口元にちよつと意地悪そうな笑みを浮かべる司。

この人、こんな表情するんだ・・・。

未香子は妙に落ち着かない気分になり、なんの気なしにカウンター
の方に視線をやった。

すると、やはりこちらに視線を向けていた匠と目が合った。

屈託のない笑顔でこちらにヒラヒラ手を振ってくる。

未香子も笑顔で手を振り返した。

匠と未香子は、そしてもちろん海音と智哉もだが、クラスメイトだ。
しかも匠とは席が前後ということもあり、比較的話をすることも多
い。

そんな未香子をクラスの女子達はみな一様に羨ましがった。

「いいなあ、みかは」

「タクミくんと仲良くできるなんて羨ましい！」

匠は女子に優しい。

彼の場合女子に限らず、だが。

明るい性格で、入学当初からクラスのムードメーカーだ。

顔だって童顔だけど、カワイイし。

(でも) 未香子はカウンターのの中にいる海音に視線を移した。

(私はどちらかと言ったら勝浦くん派だな)

海音は匠とは逆のタイプだ。

冷やかな態度と突き放したような物言い。

勉強もできる優等生だが、スポーツもそれなりにこなし、でも女子

と仲良くしている姿を見たことはない。

いつも匠や男子とつるんでいて、女子の入る隙はない。

それでも、自分に向けられることはないが、彼が友達に向ける笑顔

は屈託なく、その笑顔が密かに未香子は好きだった。

(恋愛感情じゃあないけどね・・・)

「どうした？」

「へっ？」

自分の世界に飛んでいた未香子を、司が心配そうに見ている。

「あ、すみません。ちょっと考え事しちゃって」

えへへ・・・と照れ笑いを浮かべ、すっかり水っぽくなってしまっ

たアイステイーを口に含んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8049e/>

僕の夏休み

2010年11月29日08時56分発行